

## Prémare (1666-1736) の *Notitia Linguae Sinicae*, 1720

西山美智江

### 0. はじめに

*Notitia Linguae Sinicae* (以下『漢語札記』) は、フランス人イエズス会士 J. H. M. de Prémare (以下プレマール) の書いた中国語文法書である。本書は在華カトリック宣教師による中国語文法書の中でも、中国語の本質をとらえた初めての文法書として、高い評価を得ている。<sup>(1)</sup> また 19 世紀のヨーロッパにおける標準的中国語文法のテキストであった Abel Remusat(1788-1832)の *Elemens de la Grammaire Chinoise*(1822)は、一部『漢語札記』を参考としている。<sup>(2)</sup> 今回は本書に見られる著者の中国語文法観を、他の文法書との比較を通して、明らかにしていきたい。また本書に見られる中国語を、明末清初の官話の一資料と考え、その特徴についての検討も行う。

尚『漢語札記』という日訳は石田 1932 による。*Notitia Linguae Sinicae*を英訳すれば『A Knowledge of the Chinese Language』となる。<sup>(3)</sup>

先行研究には Kund Lundbaek1991、何 2000 及び 2002、張 2003 及び 2005、内田 2001、千葉 2004 がある。また拙稿 2003 でも一部言及している。

### 1. プレマール及び『漢語札記』について

プレマール及び『漢語札記』については、Kund Lundbaek1991、何 2000 及び 2002、張 2003、千葉 2004 に詳しい記述がある。以下簡単に紹介する。

プレマールは 1666 年フランスに生まれる。1683 年イエズス会に入会。1698 年布教のため広東に到着。その後江西省に赴き、主に饒州・建昌・南昌あたりで布教生活を送る。1736 年マカオにて死去。中国名は馬若瑟。

プレマールは 1728 年に『漢語札記』をパリのコレージュ・ド・フランスの教授であった東洋学者 Etienne Fourmont(1683-1745)に送っている。しかし『漢語札記』は公表されず、その稿本は長らくパリ国立図書館に眠っていた。その後 Abel Remusat が *Elemens de la Grammaire Chinoise* の序文で紹介したことにより、存在が知られるようになる。1831 年マラッカの英華書院からラ

テン語版が出版され、1848年ロンドン伝道教会の J. G. Bridgman により英訳版が広東で出版される。

## 2. 『漢語札記』の構成

以下に『漢語札記』の構成を示す。尚、今回は何 2002『初期中国語文法学史研究資料 プレマールの『中国語ノート』』を調査対象とした。各章及び節に付したページ数も本書による。これはパリ国立図書館蔵本(マラッカ、英華書院影印、1831)の影印本であり、英訳版ではなく、ラテン語版である。

### イントロダクション

第1章 中国の書物

第2章 中国の文字

第3章 補遺 中国語の音節表

### パート1 俗語と日常的な文体

第1章 俗語の文法と統語論

第2章 中国語独自の特徴

### パート2 高貴な書物の文体での中国語

第1章 書物に関する文法と統語論

第2章 中国語の小辞の使用

第3章 中国語の文体の相違と最もよい作文の種類

第4章 中国語の表現法

第5章 エレガントな言葉のコレクション

### 索引

パート1の序文でプレマールは次のように述べている。*Quamvis eisdem litteris utantur Sinae tam in sermone quotidiano quam in libris elegantius scriptis, lingua tamen qua vulgo utuntur, longe differt a lingua quae in veteribus libris conservata est. Ut igitur linguae sinicae plena notitia possit haberi, ordo postulat ut primum tractem de lingua usu familiari trita; deinde ut de lingua librorum accurate disseram; utrumque autem duabus hujus operis partibus praestare conabor.*「中国人はたとえ日常会話にエレガントな書物の文体と同じ文字を使用するにしても、民衆の使用する言語は、古い書物に保管された言語とは全く異なる。それゆえ中国語に対する十分な知識をもつためには、順番として、第1に会話でよく用いられる言語の使用について論ずることが私に要求される。次に書物の言語

について私は正確に論述するであろう。私はこの2部の作品を成就することを試みる。」(p38) この記述から、中国語には口語と書面語が存在するという認識を彼がもっていたこと、及びパート1は口語を、パート2は書面語を扱うものとして書かれたことがわかる。今回はパート1の調査を行った。

### 3. その他の中国語文法書との比較

『漢語札記』以前に在華宣教師によって書かれた中国語文法書には、イエズス会士 Martino Martini(1614-1661)の *Grammatica Sinica*(1653) (以下『漢語語法』)、及びドミニコ会士 Francisco Varo(1627-1687) (以下バロ) の *Arte de la lengua Mandarina*(1703) (以下『官話文法』) などが知られている。両書との比較を通して、『漢語札記』の特徴について検討を行いたい。尚、今回は文法、なかでも品詞数と名詞の格変化を取り扱った。将来的には全面的な比較を行う予定である。

#### 3. 1 品詞数

『漢語語法』: 名詞、代名詞、動詞、前置詞、副詞、間投詞、接続詞の7品詞

『官話文法』: 名詞、代名詞、動詞、分詞、前置詞、副詞、間投詞、接続詞の8品詞

『漢語札記』: 名詞、代名詞、動詞、前置詞、副詞の5品詞

『官話文法』は8品詞である。この8品詞とは、ギリシア語の文法書 *Techne grammatike*(B.C 2世紀後半)からラテン語文法へと導入され、「中世末まで変わることなく受け継がれ、近代ヨーロッパ諸語の文法分析に甚大な影響を及ぼした」<sup>(4)</sup> 文法概念である。現在の品詞と異なり、形容詞は独立した品詞として扱われておらず、名詞に含まれている。

一方『漢語語法』の7品詞、『漢語札記』の5品詞は、ラテン語文法から考えると、その規範から逸脱していると言える。但し彼らは、はっきりと中国語の品詞が7品詞、または5品詞であると述べている訳ではない。『漢語語法』では第2章と第3章で文法を扱う。第2章は3つのセクション、①名詞とその語尾変化、②代名詞、③動詞の活用、に分かれる。第3章は7つのパート、①前置詞、②副詞、③間投詞、④接続詞、⑤名詞の原級、比較級、最上級、⑥代名詞補遺、⑦数と数の小辞、に分かれる。8品詞の中では、分詞に関する記述が見えない。『漢語札記』は第1章第1節で、4つのセクションに分けて文法を扱う。①名詞、②代名詞、③動詞、④残りの品詞では、副詞と前置詞について述べる。分詞については、名詞のセクションに、次のような言及がある。「職業又は職務を表す名詞は、後ろに小辞“的”をもつことを欲する。例：“讀書的”，“剃頭的”，“打鐵的”など。この場合、…“的”は確かに分詞の印であり、これら

は分詞に帰納することができる。」しかし、分詞を独立した項目として掲げてはいない。この他、間投詞、接続詞に関する記述が見えない。

プレマールがあえて8品詞を記述しなかった理由は何であろうか。その1つは、次の文に見られるように、彼の教学方法が、文法説明よりも、例文の暗唱を中心としていたため、文法説明の簡略化を心がけた結果と言える。Quamquam mihi videntur ineptum velle linguae sinicae adaptare pleraque vocabula quibus utuntur nostri Grammatici, consultius multo erit, sepositis illis grammaticae quisquiliis, per varia selectaque exempla, ad legitimum germanumque Sinicae loquelaee usum et exercitationem tyrones festinato compendiosoque gressu veluti manu ducere。「我々の文法学者が使用する多くの名称を中国語に適合させようとするのは、私には不適當に思われる。あれらの無価値な文法をやめ、様々な選ばれた例によって、手を引かれるが如く、正しい中国語の使用と練習へと迅速に有益に歩むほうが、得られるものは多いであろう。」(パート1第1章第1節第3パラグラフ)

もう一つの理由は、恐らく分詞、間投詞、接続詞の説明を書くのに、参考となる資料が不足していたためと思われる。『官話文法』にしても、『漢語語法』にしても、分詞、間投詞、接続詞の説明は他の品詞と比べると極端に短いか存在しない。『漢語札記』には『官話文法』や『漢語語法』を参考としたという記述は見あたらない。しかしKund Lundbaek1991によれば、イエズス会はバロの『官話文法』を所有していたという。また『官話文法』と『漢語札記』を比較すると、同じ例文や似通った記述がいくつか見られることから、プレマールが特にパート1第1章「俗語の文法と統語論」を書くにあたり、バロの『官話文法』を参考とした可能性は高いと考えられる。(5)

### 3. 2 名詞の格変化

ラテン語の名詞には、主格、属格、与格、対格、奪格、呼格の6格がある。それぞれの格の主な意味は次の通りである。主格は「～は」と主語を、属格は「～の」を、与格は「～に」、対格は「～を」と目的語を、奪格は「～によって」などを、呼格は「～よ!」を表す。これらの格によって、名詞はその語尾を変化させる。中国語の名詞は語尾変化をしない。そこで彼らは格を示す目印としての小辞や、語の配置に着目した。以下『官話文法』と『漢語札記』の名詞の格に関する説明を比較する。

#### 1) 主格

「主格を決める小辞はない。文中の位置によって理解され、動詞の前になければならない。“天生天地萬物”。“天主”は主格、“生”は動詞、残り是对格である。」(『官話文法』)

『漢語札記』には主格についての説明がない。

## 2) 属格

「属格は小辞“的”を後置することで示される。“天主的恩”、“造物的主”。“的”を用いないときもある。“家主”、“兵官”。属格の構成方法はとても注意深く行われなければならない。(逆にすると)別の意味になってしまう。“主家”、“官兵”。“的”の代わりに“之”を用いることもある。これは書き言葉や上品な会話でしか用いられない。“天主之子”。属格でも、ものの材質を示す場合は“的”を使う必要はない。“銅錢”“銀釘”。“的”を使って“銅的錢”“銀的釘”と言っても理解されるが、野暮ったい言い方である。文中に多くの属格が次々と現れる場合、“的”は属格を必要とする最後の語彙の前に置かれる。“這個人是福州府知府的兒子”。」(『官話文法』)

「小辞“的”は名詞の後ろに置かれて属格を表す。“天主的恩”。小辞として使用される文字は、文字の意味よりも音が注目される。そのため“的”の代わりに、しばしば“底”や“地”が見られる。意味が容易に把握される名詞が2つ続くとき、“的”は省略される。“中國”。さらに別の名詞が続くなら、“的”は最後の前に置かれる。“中國的人”、“中國的話”。しかししばしば省略され、“中國人”、“中國話”と言われる。」(『漢語札記』)

## 3) 与格

「与格は与えるという意味をもつ“與”とともに形成される。“你與我甚麼物件”。「～のために」という働きを強調する場合、“以”が用いられる。“這米是以養窮者”。会話では“以”はあまり用いられない。“與”は「～と」や「～に」という意味ももつ。“這一件事與我無干”、“與他說”。」(『官話文法』)

「与格は小辞“於”“于”“與”“和”“對”“替”などによって形成される。“與他廝見”“和他說”“對他說”“替他說了”。動詞“說”の近くには、このように小辞をつけなければならない。“說他”は「彼について言う」や「彼をとがめる」を意味する。」(『漢語札記』)

## 4) 対格

「対格を支配する小辞はない。一般的な例文では対格は動詞の後に置かれる。“你該愛天主”。前に置かれる場合もある。“一天一百里路我會走”。しかし後に置いた方がよい。」(『官話文法』)

「対格は小辞のしるしをもたない。動詞の後に置くのが習慣である。“我打你”。しかし、しばしば前に置かれる。」(『漢語札記』)

## 5) 奪格

「奪格は“同”だけでなく、「～とともに」を意味する“合”、“共”、“與”、“對”、“於”とともに形成される。“與同他去”、“我合他講了”、“對他說了”、“共去”、“與他去”、“救

我於我讎”。」(『官話法』)

「「～から」を表す奪格は、小辞“的”を欲する。“鐵的”。確定したものが述べられる時は、“的”が省略される。“鐵鍋”“銅羅”“銀杯”。」(『漢語札記』)

#### 6) 呼格

「呼格には小辞“呀”がある。これは感嘆文にしか現れない。“呀吾主赦我罪”。感嘆詞「ああ」は“哉”を名詞の後に置いて示される。これは話し言葉ではなく書き言葉である。“妙哉救世弘恩”。」(『官話文法』)

「呼格は小辞“阿”によって認識される。“郎君阿”。人称名詞が2度繰り返される時は呼格のしるしであり、概して2人称代名詞“你”が続く。“淡仙淡仙我和你好無縁也”。」(『漢語札記』)

共通点としては、両書とも、属格を示す“的”や与格を示す“與”など、格の目印として「小辞」に着目している点が挙げられる。また対格の説明はとてもよく似ている。そして属格の説明には、“天主的恩”という同じ例文が用いられている。

異なる点としては、『漢語札記』の方が、説明の仕方がより簡略化されている。また『漢語札記』には、白話小説からの例文が多く、呼格の例として挙げられた文も、白話小説からの引用であると考えられる。

## 4. 日本語文法書との比較

Joao Rodriguez (以下ロドリゲス) はポルトガル人イエズス会士である。彼は日本で宣教活動を行い、2冊の日本語文法書、1604年印刷の『Arte da lingua de Iapam』(以下『日本大文典』)と、1620年印刷の『Arte breve da lingua Iapoa tirada da arte grande da mesma』(以下『日本小文典』)を書いた。『日本小文典』は『日本大文典』を初学者用に書き改めたものとされる。

ロドリゲスの『大文典』『小文典』は日本語の文法書ではあるが、以前からバロの『官話文法』との関連が指摘されており<sup>(6)</sup>、その文法観には、『漢語札記』と共通するものも見られる。今回はいくつかの共通するキーワードを取り上げて、『漢語札記』の文法観を知る手がかりとしたい。

### 4. 1 小辞

ラテン語 *particula* は「小辞、不変化語」と訳される文法成分である<sup>(7)</sup>。次にロドリゲス、バロ、プレマールに見られる小辞に関する記述を挙げる。

1) ロドリゲスは日本語の品詞を10品詞とした。その内訳は、名詞・代名詞・動詞・分詞・

後置詞・副詞・感嘆詞・接続詞・冠詞・小辞である。「日本語の理解を容易ならしめるため」ラテン語の8品詞に加え、小辞を品詞の1つとして認めたのである。そして次のように小辞の重要性について述べている。「ところでこうした小辞を正しく用いるか誤った用い方をするかによって、正確で誤りのない美しい言葉遣いができるか否かがきまる。したがって正しい用い方ができないと誤りを含み適切さを欠いた言葉遣いとなる。」(『日本語小文典』第2部・品詞九・小辞)「既にいくつかの例によって述べた如く、すべての格辞は或ものが他のものの後に接して、色々な又上品な言い方をなすものである。」(『日本語大文典』第2巻・格辞の構成)

2) バロは8品詞以外に小辞のための章を設けている。『官話文法』第13章は「様々な小辞」と題し“當”，“一”，“打”，“得”，“著”，“替”，“然”，“今”，“便”，“百”，“可”の11の語彙について例を挙げ説明している。

3) プレマールは小辞の使用こそが中国語の特色の一つであると述べる。*Linguae hujus ubertas, amaenitas ac visum ex frequenti certarum litterarum usu, ex variis particulis, denique ex figuris, mirum in modum elucet. Quare haec tria totidem articulis fuse et accurate tractare volo.*「この言語の豊かさ、美しさ、そして力は、多くの一定の文字の使用から、様々な小辞から、最後に表現法から、驚くべき程度へ輝き出る。ゆえに私は3節もの多くで十分にそして綿密に論じたい。」(第2章)。『漢語札記』パート1全104頁中、94頁を占める「第2章・中国語独自の特徴」は、「第1節・幾つかの文字の使用」、「第2節・会話でよく用いられる小辞」、「第3節・表現法」の3つに分かれ、第1節では“得”，“把”，“一”など16の語彙について、第2節では“也”，“又”，“就”など77の語彙について、第3節はさらに①反復、②対句、③疑問、④ことわざに分かれ、それぞれ多くの例を挙げ説明している。なかでも「第2節・会話でよく用いられる小辞」が占める割合が最も高く、44頁にも及ぶ。

#### 4. 2 文学作品

ロドリゲスは『日本語小文典』で次のように述べている。「つぎに生徒が学ぶべき書物であるが、これは文章体の書物、しかも文体が美しいため日本人のあいだでしかるべき評価を得ている過去の古典的著者の手になる書物でなければならない。こうした書物であれば、そこには日本語のもつ優美・高雅・端正なるものがすべて存するのであって、日本人でさえこの種の書物によって積極的に学んで自分のことばを磨いているのである。」そして読むべき書物として彼が挙げているのは、「幸若舞」、「草子」、『撰集抄』、『発心集』、『平家物語』などである。このように古典文学に学ぶべき規範を求める態度は、中世後期からルネサンスにかけて、ヨーロッパを席卷した思想潮流である。「ルネサンスの学問の最も重要な点は、イタリアを先頭にして、古典

ラテン語と古典ギリシア語の研究の復活をなしとげたことであろう」<sup>(8)</sup>。「この時代には曾つて見られなかったほどに、Cicero、Vergilius、OvidiusなどCL (Classical Latin) の異教作家が尊重され模倣された」。<sup>(9)</sup>

この Cicero、Vergilius の名は、『官話文法』にも見える。「ラテン語を学ぶ場合でも、Nebrixa の全ての規則を知る人が、偉大なラテン語学者であるとは限らない。Cicero や Vergilius が必要である。しかし、Cicero や Vergilius を持っていたとしても、最初に Nebrixa の規則を習得していなければラテン語学者にはなれない。同じように宣教師はまずこの小冊子の規則と忠告を知らなければならない。その後で中国における Cicero、実際には“小説”と呼ばれる本に触れなければならない」(『官話文法』序文)。しかし『官話文法』には具体的な“小説”の名前は挙げられておらず、本文中にとられた例文にも“小説”からの引用は見られないようである。

『漢語札記』は、以下に示すように、学ぶべき具体的な“小説”の名前を挙げ、また本文中の多くの例文も“小説”からの引用であると思われる。Hac prima parte loquor de lingua mandarina, prout in ore hominum politorum versatur, juvat statim indicare libros aliquot ex quibus hausi quidquid dicturus sum; …Omnes reducuntur ad comoedias et ad opuscula quae dicuntur 小説 siao chou. Emi poterunt 1 元人百種 yuen gin pe tchong. Continet haec collectio centum comoedias quae sub dynastia 元 yuen prodierunt; …2 水滸傳 choui hou tchouen. Sed ut secretus hujus libri sapor melius sentiatur, emendus erit qualis ab ingenioso 金聖嘆 kin ching tan fuit editus, …Huic historiae quae satis longa est, libros enim (sinice 卷 kuen) continet 75, aliquot multo breviores ddentur; quales sunt 畫圖緣 hoa tou yuen, 醒風流 sing fong lieou, 好速傳 hao kieou thcouen, 玉嬌梨 yo kiao li, &c. 「このパート1では、優雅な人々が話す官話について述べる。それにはいくつかの本をしっかりと評価するべきである。…全ては喜劇と“小説”と呼ばれる小作品へと導かれる。私はこれらを買うことができた。まずは『元人百種』、この寄せ集めは百の喜劇を含み、元王朝下で出版された。…次に『水滸傳』、この本に秘められた味をより感じるためには、優れた才能をもつ“金聖嘆”が注をつけて発行したものを買うべきである。…この物語は十分に長く、七十五冊(中国では“巻”)から成る。他にはより短いもの、『畫圖緣』、『醒風流』、『好速傳』、『玉嬌梨』などが加えられる。」(第一章・序)

以下、『元曲選』、『水滸伝』からの引用と思われる例を挙げる。

- 1) 兀那婦人不要啼哭。(元曲・救風塵・2)
- 2) 你這廝誰叫你去來。(水滸・20)

『元曲選』や『水滸伝』に記されたことばは、今の私たちから見れば、彼が中国に滞在した18世紀初頭のことばに比べ、より古い時代に属すると考えられる。これはロドリゲスが「立



派で上品な言葉は古語である」とし、「幸若舞」、「草子」、『撰集抄』、『発心集』、『平家物語』など鎌倉、ないしは、室町時代成立の書を拠るべき模範としたのと同じものがある。この考えは、当時のヨーロッパ人がもつラテン語学の伝統にのっとったものである。

以上、「小辞」と「文学作品」というキーワードを通して『漢語札記』の特徴の一端を考えてみた。彼ら宣教師の言語観の基本となっているものは、やはりラテン語学である。しかしロドリゲスと同様、プレマールもラテン語文法ではあまり重要視されない「小辞」こそが、中国語文法を理解する上で重要であると判断した。また当時の人々に広く読まれていた古典小説から上品な口語を学ぶべきであるという意見も一致している。

## 5. 中国の伝統的文法概念との出会い——虚実論

中国語の文法は『馬氏文通』(1898)より始まる、というのがこれまでの一般的な認識であった。ここ数年、『漢語札記』のような在華宣教師の書いた中国語文法の研究が活発となり、『馬氏文通』以前に、すでに欧米人による中国語文法研究の遺産が存在することが周知のこととなった。しかしヨーロッパ人が *grammatica* を導入する以前に、中国には独自の文法が存在していた。それは「虚詞」についての研究である。元・盧以緯の『助語辞』(1324)を始め、清代には袁任林の『虚字説』(1710)、劉淇の『助字辨略』(1711)など多くの虚詞関係の書が著されている。これら古典中国語学の伝統と、在華宣教師文法とを結びつけて論じた文に、内田 2001 がある。本編でも『漢語札記』の中国語観を知る手がかりとして、虚実論に関する記述を取り上げてみたい。

『漢語札記』には、次のような記述がある。Grammatici Sinae litteras quibus oratio componitur dividunt in 虚字, litteras vacuas, et, 實字 plenas seu solidas. Vacuas appellant quaecunque orationi non sunt essentielles. Nulla enim littera proprie vacua est, sed in se semper aliquid significat. Adeoque cum litterae supponunt pro meris particulis et dicuntur vacuae, id fit per 假借, seu metaphoram, hoc est a proprio sensu ad alienum transferuntur. Litterae solidae, 實, sunt eae sine quibus oratio constare nequit, easque subdividunt in 活字, vivas, et 死字, mortuas; per vivas designantur verba, et per mortuas nomina.

「中国の文法学者は文を形成する文字を、“虚字”「内容のない文字」と“実字”「全部揃った或いは完全な文字」に分ける。彼らは実体のない言葉をどれも「内容のない」と名付ける。もともと内容のない文字など1つもなく、文字は常に何かを意味する。しかし文字は単なる小辞として付加される時、「内容のない」と言われる。これは本来の意味から他のものへ変化させる“假借”或いは隠喩法により行われる。完全な文字“実”は、それなしでは文が存在できないものであり、“活字”「生きている」と“死字”「死んでいる」に小分けされる。「生きている」により動詞が、「死んでいる」により名詞が表示される。」(パート1 第1章)

もともと「虚字」「実字」、「活字」「死字」とは、宋の『誠齋詩話』、『対牀夜語』、『詩人玉屑』など詩文を論ずる書中に見られる術語である。『対牀夜語』が「虚字」「実字」、「活字」「死字」と記す語を、現代の文法に当てはめると次のようになる。「実字」は名詞と数詞を含み、「虚字」はまた「虚活字」と「虚死字」に分かれ、「虚活字」は動詞を、「虚死字」は形容詞、副詞、前置詞、接続詞などを含む。(10)

上記のプレマールの文には例がないため、はっきりとは判断できないが、彼の分類は宋代の虚実論とは異なっている。彼は「実詞」が「活字」と「死字」に分かれ、「活字」は動詞を表し、「死字」は名詞を表し、文字が小辞となる時「虚字」と言われるとする。プレマールの説に近い記述は、清の『虚字説』に見られる。「耳目體也，死實字也，視聽用也，半虚半實字也。」(『虚字説』虚字総説)すなわち『虚字説』では名詞を「死実字」とし、動詞を「半虚半実字」とする。動詞については異なるが、名詞についてはほぼ等しいと言える。

彼がどのようにして清代の虚実論と出会ったかを推察する手がかりが、Lundbaek 1991に見える。プレマールは『説文解字』を重視し、『六書実義』という「六書」を解説した本を書いている。また彼は『説文』について教えを請うため、劉凝(1625-1715)という人物を江西省南豊県に訪ねている。劉凝は同省崇義県で訓導を務めた後、南豊県に帰郷し余生を過ごしていた文人で、『六書夬』、『石鼓文定本』などの書を執筆している。(11) この劉凝はクリスチャンであったという。彼ら宣教師にとって、このような改宗した中国文人の存在は非常に大きかったと考えられる。

この「虚字」「実字」、「活字」「死字」という術語は、モリソンの『Grammar of the Chinese Language』(1815)、エドキンズの『A Grammar of the Chinese Colloquial language commonly called the Mandarin Dialect』(1864)、そして『馬氏文通』へと受け継がれていく。伝統的中国語学の虚実論が、宣教師により中国語文法の特徴の一つであると見いだされ、中国人による中国語文法へと再導入された経緯について、その詳細は今後の研究課題としたい。

## 6. 『漢語札記』の語彙・語法

先にも触れたように、『漢語札記』は中国語の例文の多くを、元曲や水滸伝など旧白話小説から引用しているものと思われる。個々の例文の典拠についての調査は今後の課題としたいが、以下特徴的であると思われる語彙・語法について、その例を列挙した。品詞分類は筆者の判断による。

### ①名詞

1) “面孔”：“面孔紅了又白，白了又紅”(第2章・第2節・8)

“臉”も用いられる。

- 2) “生意”：“把我們的生意弄得這般冷淡”（第2章・第1節・2）

## ②代名詞

- 1) “我每”（第1章・第1節・1）

人称代名詞は以下のものが見られる。

	单数	複数
1人称	我	我們 我每
2人称	你 您	你們 你等
3人称	他	他們

- 2) “自家”：“這樣苦事是我自家惹出來的”（第2章・第1節・5）

“自己”と同じ意味であると説明される。“自己”を用いた例文はない。

- 3) “恁的”：“恁的却不好”（第2章・第2節・10）

“恁般”：“不要恁般愁苦”（第2章・第2節・23）

“這樣”“這般”も用いられる。

- 4) “怎的”：“你不走待怎的？”（第2章・第1節・14）

“怎生”：“怎生是好？”（第2章・第1節・13）

## ③数詞

- 1) “些”：“快些來”（第1章・第1節・4）

“點”は1例のみで、“些”が多用される。

- 2) “把”：“百把銀子”（第2章・第1節・2）

## ④量詞

- 1) “樁”：“這兩樁大事還該從那一樁做起？”（第2章・第2節・17）

“件”も用いられる。

## ⑤形容詞

- 1) “歡喜”：“肚裡好歡喜”（第2章・第2節・2）

“鬧熱”：“十分鬧熱”（第2章・第2節・2）

“喜歡”“熱鬧”も1例ずつ見られるが、“歡喜”“鬧熱”が多用される。

## ⑥動詞

- 1) “喫”：“還是喫酒還是做詩？”（第2章・第2節・15）

“茶”を目的語にとる例も見られる。

- 2) “曉得”：“那曉得他外邊的事？”（第2章・第3節・3）

“知道”も用いられる。

### ⑦前置詞

- 1) “吃”：“吃人笑話”（第1章・第1節・3）

被動文を作る前置詞として“被”“吃”“見”の3つが見られる。

- 2) “教”：“休教人看見”（第2章・第2節・13）

“交”：“交外人來欺負我”（第2章・第2節・13）

使役文を作る前置詞として“叫”“教”“交”の3つが見られる。

- 3) “替”：“替他說了”（第1章・第1節・1）

「彼に言う」は“和他說”“對他說”“替他說”の3つの言い方が挙げられる。

- 4) “與”：“與我打箇照面”（第2章・第1節・3）

前置詞としての用例と、動詞の後につく用例とが見られる。

- 5) “同”：“同他去遊玩遊玩”（第2章・第3節・1）

### ⑧副詞

- 1) “別要”：“別要信着”（第2章・第2節・1）

- 2) “不曾”：“不曾見這等好笑”（第2章・第1節・13）

動詞の否定には“不曾”が多用される。この他“沒有”が若干、“沒”及び“沒曾”が1例ずつ見られる。

- 3) “待要”：“你待要上天我就隨着上天”（第2章・第1節・14）

- 4) “好”：“教我肚裡好悶”（第2章・第2節・13）

- 5) “好生”：“心中好生痛切”（第2章・第1節・8）

- 6) “煞”：“你也煞老實了”（第2章・第2節・2）

- 7) “忒”：“却忒早了些”（第2章・第2節・2）

“忒殺”：“你忒殺嘮叨”（第2章・第2節・2）

- 8) “一發”：“一發好”（第1章・第2節）

“越發”：“越發好”（第1章・第2節）

### ⑨接続詞

- 1) “將”：“把舌頭伸將出來”（第2章・第1節・2）

### ⑩助詞

- 1) “波”：“可不是波？”（第2章・第2節・5）

- 2) “哩”：“我牢記着哩”（第2章・第2節・11）

- 3) “則箇”：“皇天可憐垂救則箇”（第2章・第2節・16）

## ⑪感嘆詞

1) 兀 ”：“兀那婦人不要啼哭”（第2章・第2節・4）

“兀的”：“兀的不是我兄弟”（第2章・第2節・4）

## ⑫疑問文

1) “可…麼？”：“你可知道麼？”（第2章・第2節・14）

2) “…也未？”：“父親吃飯也未？”（第2章・第3節・疑問）

## ⑬補語

1) “～得緊”：“說些甚麼好不密切得緊哩”（第2章・第2節・5）

2) “～得極”：“妙得極”（第2章・第1節・1）

3) “殺”：“真正快活殺”（第2章・第2節・2）

## 7. おわりに

以上見てきたように、『漢語札記』にはプレマールの言語観を構成する様々な要素が見られる。

## 1) ラテン語文法

当時のヨーロッパでは文法と言えばラテン語文法であった。パート1第1章「俗語の文法と統語論」も手短ながら、名詞の格変化や動詞の時制など、ラテン語文法にのっとった説明を行っている。

## 2) 宣教師文法の伝承

『漢語札記』には先任者による中国語文法についての記述は見あたらない。しかしパート1第1章「俗語の文法と統語論」には、バロの『官語文法』を参照とした痕跡が残されている。また小辞を重要視する点も、バロやロドリゲスと一致している。

## 3) ラテン語文法からの逸脱 -イエズス会の適応主義

ラテン語の8品詞にこだわらず、文法説明をなるべく簡略化し例文暗唱を奨励している。これはイエズス会の適応主義を彷彿とさせる。「中国語をヨーロッパの言語に従うものと見なさず、むしろあなたの言語自身を中国語に適応させるべきだ。」（『漢語札記』パート1第1章）。

## 4) 伝統的中国語学 -虚実論

虚実論という伝統的中国語学との出会いが見られる。これは改宗した中国知識人から教えられたものである可能性が高い。

これらの要素が絡み合い、その結果、文法説明を簡略化し、小辞を重視し、文学作品からの例文を大量に列挙するという『漢語札記』独自のスタイルが生み出されたと考えられる。引き

続きパート2の調査を行い、プレマールの言語観の全体像を明らかにしていきたい。

注：

- (1) Bridgman 1847 など。
- (2) Lundbaek 1991。
- (3) Lundbaek 1991。
- (4) ロウビンズ 1992。
- (5) 3. 2の2) に挙げた例文、及び次の例文などに共通点が見受けられる。「形容詞は普通“的”を後に置いて形成される。例“長的”，“短的”，“白的”，“黑的”。2つの類義語からなる形容詞が名詞の前に置かれる場合は、“的”を用いない方が上品である。例“富貴人”。」(『官話文法』)
 

「形容詞はしばしば“的”をもつ。例“好的”，“歹的”，“白的”，“黑的”。2つの音が同義であるか関係したものならば(“的”)は好みに応じて置かれたり省略される。例“富貴的人”，“富貴人”。」(『漢語札記』)
- (6) Coblin / Levi 2000
- (7) 『羅和辞典』
- (8) ロウビンズ 1992。
- (9) 国原 1975。
- (10) 青木 1970。
- (11) 江西省南豊県志に次のような記述が見える。「劉凝、字二至、冠寰子。弱冠籍諸生、性嗜學、購書至數萬卷。研討入奥、尤精古六書之學。著『六書夬』、『說文解字韻原』、『引書同異』、『石經本末』、『孝經全本注』、『石鼓文定本』、『録樊合注』、『稽禮辨論』及『爾齋文集』以貢授崇義訓導。」(中国方志叢書華中地方 826『江西省南豊県志二』卷二十六、成文出版社有限公司印行)。

## 参考文献

- J.G.Bridgman 1847: *The Notitia Linguae Sinicae of Premare*; Canton.
- Kund Lundbaek 1991 *Joshph de Premare(1666-1736)*, S.J.
- Giuliano Bertuccioli 1998: *Martino Martini S.J. Opera omnia* Universita degli studi di Trento
- Coblin / Levi 2000 *Francisco Varo's Grammar of the Mandarin Language (1703)* John Benjamins Publishing Company Amsterdam / Philadelphia
- 袁任林著、解惠全註 1989『虚字説』中華書局
- 石田幹之助 1932『欧人の支那研究』共立社
- 青木正児 1942「詩文書画論に於ける虚実の理」(『支那學』第十号特別号 支那學舎)  
1970「虚字考」(『青木正児全集』第7巻 春秋社)
- 田中秀央編 1952『羅和辞典』研究社
- 土井忠夫 1955『日本大文典』三省堂
- 国原吉之助 1975『中世ラテン語入門』南江堂
- R.H.ロウビンズ 1992『言語学史』第3版 研究社出版
- 池上岑夫訳 1993 岩波文庫 ロドリゲス『日本語小文典』(上)(下) 岩波書店
- 大島正二 1997『中国言語学史』汲古書院
- 馬場良二 1999『ジョアン・ロドリゲスの「エレガント」-イエズス会士の日本語教育における日本語観』風間書房
- 何 群雄 2000『中国語文法学史始』三元社  
2002『初期中国語文法学史研究資料J.プレマールの『中国語ノート』』三元社
- 内田慶市 2001『近代における東西言語文化接触の研究』関西大学出版部
- 張 西平 2003『西方人早期汉语学习史调查』中国大百科全书出版社  
2005『传教士汉学研究』大象出版社
- 千葉謙悟 2004, 2005「プレマール『中国語文注釈』(1)~(3)」或問第8号~第10号
- 西山美智江 2003「近代ヨーロッパ人の書いた中国語文法-Francisco Varo の『Arte de la lengua Mandarina』(1703)を中心に」関西大学中国文学会紀要第24号

